

私とビントロとサラリーマン

その日、私は一人で回転寿司店に行った。平日にも関わらず大変な混雑。おかげでカウンター席についたのは二時間後のことだった。おいしそうに目に前を回るすしの行列を見て私は不思議に思った。マグロの後ろにいる、ビントロとは何者なのか、と。検索しようとするも、先ほどの待ち時間で充電はゼロ。頭の中はもうビントロでいっぱいだった。その時、隣の席のサラリーマンがそれを手に取った。私は聞かずにはいられなかった。「ビントロって何の魚ですか。」と。

それがきっかけで一人の味気ない食事は終わり、会話は面白いほど弾んだ。なぜ一人飯なのかということや、今年の夏の暑さなど他愛のない話がほとんどだった。しかし、家族の話だけは違った。聞いてみると、その人は私の父と同年で、高校二年生の娘がいるそうだ。そして、「娘が高校生になってから、接し方がわからなくなった。」と笑っていた。私はハッとした。なぜなら、私と父も会話が減っていたからだ。この話を聞いて、もしかしたら父もこの人と同じ気持ちなのかもしれないと思い、どんなことでもいいから話してみようと思った。

楽しい時間はあっという間に過ぎた。私が帰ろうとした時、その人は「素敵な時間を過ごさせてもらったお礼に。」と言って、私のお代まで支払ってくれた。私は申し訳なく思い、せめてものお返しにと景品のキーホルダーを渡した。すると、「娘にあげるわ。」と笑顔で受けとってくれた。そして、互いにありがとうと言ってその場を後にした。私はその帰り道、温かい気持ちで満ちていた。

高校生の私とそのサラリーマンは、隣に座らなければ一生関わらない人だったに違いない。私はそんな人を通して見えない父の思いを知ることができて良かったと思う。そして、結局何者なのかはわからず終いだったが、私とサラリーマンを出会わせてくれたビントロには感謝して止まない。ありがとうビントロ。